

国史跡 黒井城跡

—— 戦国動乱のかずかずの歴史を秘めながら
400年余りの風雪に耐え、
城跡は今、静かな陽の中にある ——



本丸石垣と下館跡（現興禅寺）



山頂の本城部



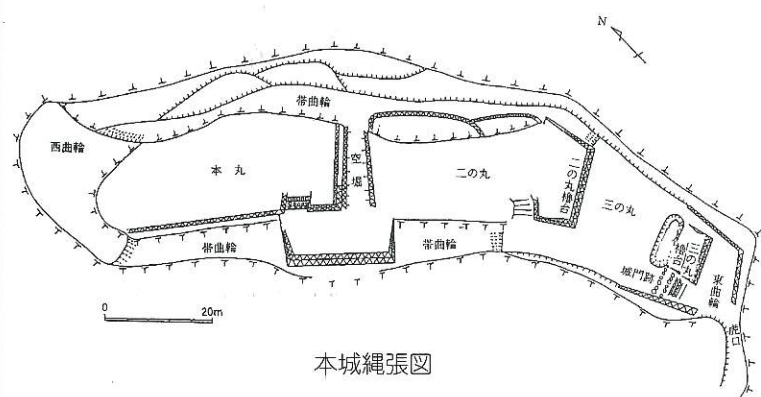
◆ 本城部分全景

本城部は、黒井城の中心部です。半独立した猪ノ口山の山頂(標高356m)を平らに削り、中央より少し西にかたよって一番高く広く本丸(48m×22m)をおき、西に西曲輪を接続させ東に空堀を隔てて二の丸(40m×19m)、さらに角度をやや南にふって三の丸(28m×23m)と東曲輪(20m×15m)を次第下がりの段階状に配しています。

また、これらを取り巻いて南側、北側に約5mの段差で帯曲輪を巡らしています。これは、段階状接続城郭と呼ばれ、中世の山城に多く見られる縄張りです。本城の虎口(入り口)周辺と、本丸、二の丸の南面には自然石をそのまま使った野づら積み石垣が積み、いかにも戦国の城らしい荒々しさを見せています。



◆ 本丸



本城縄張り図

これらの石垣は黒井城落城の後、城下統治にあたった斎藤利三、堀尾吉晴など織田・豊臣政権下の武将によって築かれたのではないかと指摘されています。

この本城部分にどのような建物が建っていたのかは資料もなく判然としませんが、空堀を中心にして本丸二の丸の一部からこの時代特有の分厚い屋根瓦が多量に出土することから、瓦葺きの建造物があったことが想像されます。



◆ 本丸から二の丸・三の丸石垣を望む



◆ 東曲輪野づら積み石垣

黒井城全図

黒井の町並みのすぐ北側にそびえる黒井城跡は、猪ノ口山（標高356メートル）にある山城で、南北朝時代の建武2年（1335）春日部莊を領した赤松筑前守貞範が山頂に砦を築いたことからその歴史が始まります。

その後、約200年間の数代にわたって城主の変遷がありました。戦国動乱のさ中の天文23年（1554）萩野（赤井）悪右衛門直正が城主となり、その勢力の拡大とともに大改修の手を加えたのが現在の黒井城跡です。

一番高い山頂の本城部分には、複数の曲輪を並べ、これを囲んで中腹に6つの曲輪を配置し、さらに重要な尾根には、砦を築いています。

また、山中のいたる所に曲輪跡・土塁・堀切り・切り岸などの防御施設が埋もれていて、約120ヘクタールにも及ぶ広大な猪ノ口山系全体が城域であり国の史跡となっています。

天正7年（1579）8月、さしも堅固を誇った黒井城も、丹波平定を急ぐ明智光秀の大軍の前に落城を上げました。

その後、一部本城部分に改修が加えられましたが、400余年の風雪に耐え、今でも戦国時代から織豊時代へかけての城の様子をそのまま残している城跡として高い評価を受け、平成元年国の史跡に指定されました。



本丸虎口



▲黒井城跡・正面全景 広大な猪ノ口山系のすべてが国の指定史跡となっています。

とりで くるわ 本城を囲む曲輪と砦



▲北へのびる尾根と龍ヶ鼻砦

城の中心である本城を守るため、Y字形にのびる猪ノ口山系の4つの尾根の重要な位置に、それぞれ曲輪や砦を配置して防御を固めています。これらが完備したのは、おそらく天正3年(1575)から天正7年(1579)に及ぶ明智光秀との攻防戦に備えた頃と思われます。

大手道である正面の南尾根には三段曲輪を配し、つづいて7合目あたりに規模の大きな石踏の段を構えて敵の進攻に備えています。

また同じ等高線上に太鼓の段、東の尾根には東出丸、北面に北の丸、さらに深い谷をへだてて西の丸を横一線に配置し、相互の連絡ルートを設定して本城の周囲を守っています。

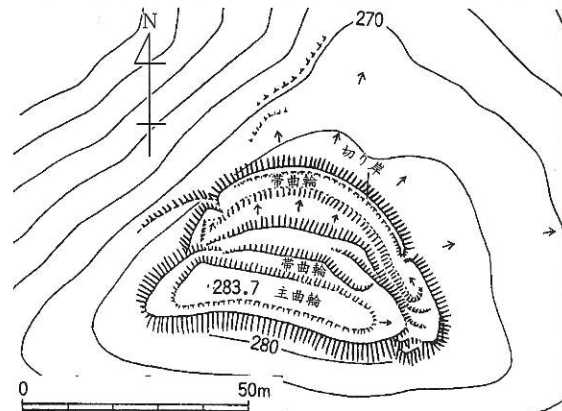
このルートは、敵の進攻に合わせて味方が各曲輪間を移動して戦うための工夫で、戦国末期の山城によく見受けられます。

本城部を中心とする主な尾根上約1キロメートル前後の位置に、最前線の防御拠点として東山砦、龍ヶ鼻砦、千丈寺砦があります。

それぞれの砦は、曲輪や土塁、堀切りなどを築くとともに、軍勢の駐屯のための足場となるような平坦地も認められ、独立した城郭としての機能を果たすことも意図したものと考えられます。(黒井城全図参照)

●龍ヶ鼻砦

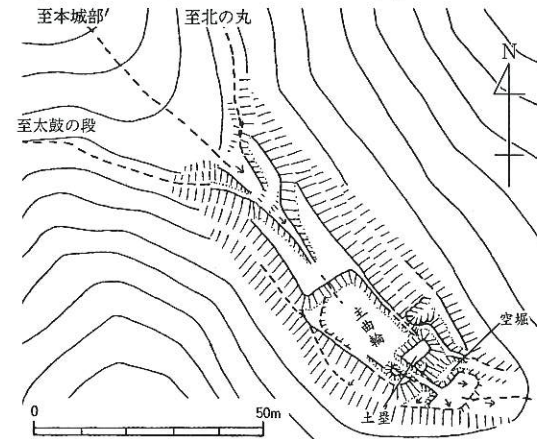
本城から北にのびる尾根の最前線には、龍ヶ鼻砦を配置して守りを固めています。



龍ヶ鼻砦縄張図

●東出丸

東の尾根筋の防御のため土塁を積み上げ、周りに空堀をめぐるしています。



東出丸縄張図



▲三段曲輪



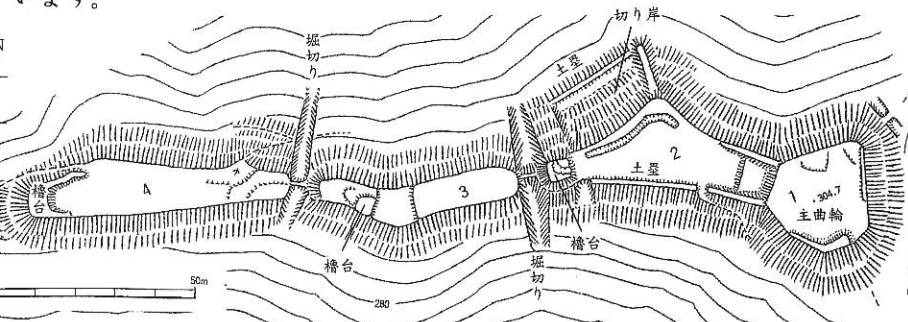
▲石路の段 大手道最大の曲輪

●千丈寺砦

西の尾根の先端にあり、黒井城西方の押さえとして重要な砦です。東西約30メートルの曲輪と、それを囲む土塁の遺構が残り、また西の山麓には赤井家の墓所があります。

●西の丸

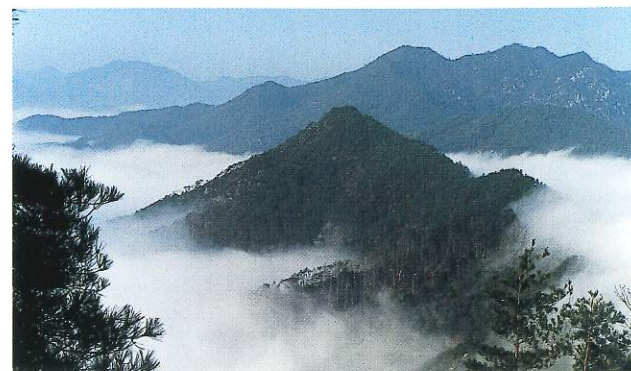
本城から西へ深い谷を隔てて配置された曲輪で、小城とも呼ばれ、城の建物があったと思われます。土塁・堀切り・櫓台・切り岸など戦国の城の遺構が見事に残っています。



西の丸縄張図

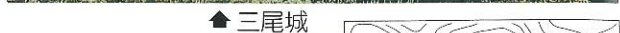


▲太鼓の段



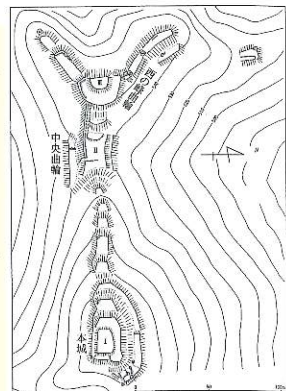
▲霧に浮かぶ千丈寺砦

支城·砦配置図

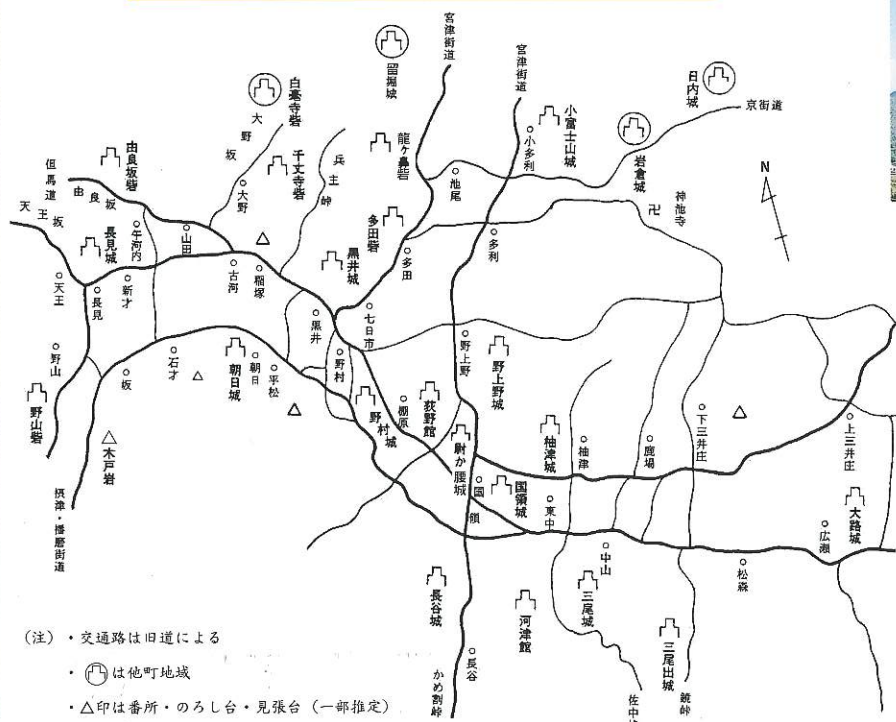


▲ 三尾城

三尾城を築いたのは、黒井城主荻野直正の弟赤井郡幸家で、天正7年(1579)黒井城落城とともにその城史を閉じました。すぐ南の下を篠山市へぬける佐中峠越え街道が通り、北の山麓には東へ向う栗柄峠越えの京街道が走っていて、黒井城東方の最重要地点にあり、数ある支城のなかでも、最も重要な支城です。遺構は、いちばん南にそびえる標高596mの主峰に設けた本城部分と、相対する東と西の峰に配置された曲輪群、本城・東・西の峰からの道があつまる中央曲輪、さらには本城から東にのびて鏡峠に達する尾筋に築かれた出城の5つの部分に分けられます。



三尾城繩張図



(注)・交通路は旧道による

・ は他町地域

・△印は番所・のろし台・見張台（一部推定）

黒井城が多紀郡の八上城とともに丹波での強力な城になるに及んで、
本拠領地である町内には、「支城・砦配置図」のように本城を囲んで多
くの支城・砦などが配置され町内全体が大きな要塞を形成しています。

ここで着目すべき点の第1は、支城と支城との間隔が短かくて約1km、長いものでも約2km程度に保たれていることです。第2には、重要な交通路の要所に支城、砦を配置し敵の来襲を未然に防ぎ、また侵入を早めにキャッチして、いち早く本城に伝える防衛体制がしかれていることです。

城主荻野(赤井)悪右衛門直正

甲斐武田氏の甲州流軍書「甲陽軍鑑」に、「名高き大将衆」13人の筆頭に「丹波ノ赤井愚右衛門」と記され、近隣諸豪から「丹波の赤鬼」と呼ばれて恐れられた直正は、萩野氏の一族である水上町新郷の後屋城主赤井氏の出自で、幼名を赤井才丸といい、幼少の頃から豪胆、知勇に優れていました。

春日町朝日の朝日城を拠点とする荻野十八人衆の盟主として請われ、荻野姓を名乗りました。

天文23年(1554)の正月2日、年賀の席で黒井城主荻野伊豫守秋清を刺殺して黒井城主となり、これより悪右衛門と号し、黒井城南麓(現興禅寺地所)に下館を設け本格的に黒井城及び城下町の整備に着手しました。

折しも、勢力を伸ばしてきた織田信長に直正は一度は服命しますが、但馬此隅城の山名氏との関係が悪化し、これが一因で信長と敵対することとなります。

信長は、天正3年(1575)明智光秀を総大将として丹波平定に派遣しました。光秀は、八上城主波多野秀治ら丹波の国人衆の過半を服従させ黒井城を包囲しました。

交戦は2ヶ月に及び、翌天正4年(1576)1月15日、かねての盟約どおり突如波多野軍が寝返って光秀の陣を急襲し、総崩れとなった光秀は壊滅的打撃を受け亀山城に帰城しました。これを後世「赤井の呼び込み戦法」と呼んでいます。

信長との対決が間近になった直正は、毛利氏の提唱する「三道併進策」に呼応し、反織田勢力の毛利、吉川、武田、石山本願寺等と同盟を結びその一翼を担いましたが、天正6年(1578)3月9日病没します。

一説には、首切り疔を病んでいたといわれています。

直正の死後、盟主を失った黒井城は、日に日に士気が衰え、その勢力も衰退し、光秀の第2回目の黒井城攻めに、遂に落城の憂き目を見ることとなりました。

勇猛を誇った直正の武勇伝は、この地に伝わる黒井音頭にも長々と
うたわれ、今も人びとの間で語り継がれています。



▲小富士山城

旧宮津街道の抑えの拠点として築かれ、黒井城攻めの際、明智光秀の陣城がおかれたと伝わっています。



◀ 赤井氏宝きょう印塔

興禅寺裏山にある赤井氏有縁の宝きょう印塔で、江戸と明治期に千丈寺赤井家墓所からここに移されました。嘉吉3年(1443)、文安5年(1448)の銘があり、室町期の特長をよく備えています。



惡右衛門直正着用兜 ➡

鉄地に黒漆塗り5枚綴(しろ)仕立の室町時代の野戦用兜です。萩野悪右衛門直正が着用していたもので生家の祖父赤井伊賀守忠家から伝わったものです。

直正の死後、武運長久、子孫繁栄を願ひ鎮守・兵主神社へ奉納されています。



▲直正書状 荻蕪の署名と花押

黒井城にまつわる人びと

このえ さきひさ のぶただ
近衛前久・信尹

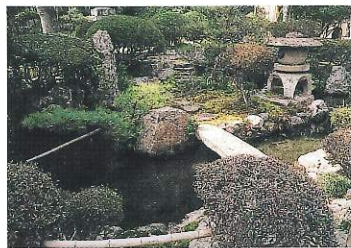
永禄8年(1565)、船城郷稲塚村の波多野総七の娘が京都関白近衛家の女中として奉公に上がり、懐妊して稲塚村に帰り男子を出産しました。この子は、関白近衛前久の子息で幼名を信基と称し、8才まで総七のもとで養育されました。

こんな関係もあって時の将軍足利義昭と不仲になった前久は、永禄11年京都を出奔して丹波に入り、黒井城主荻野悪右衛門直正の庇護を受けました。直正は下館の中に前久の屋敷を構え、近衛屋敷と呼びました。

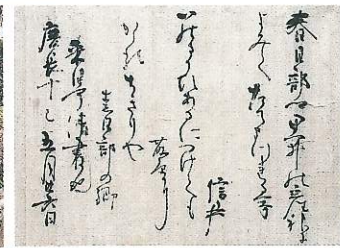
前久は数年間をここで過ごしましたが、現在興禅寺に残る庭園は、前久が自ら設計・指導したものといわれています。また直正の内室は、前久の息女か妹であったと伝わっています。

その後信基は近衛家に引き取られ、名を近衛信尹と改めました。信尹は沢庵和尚に禅を学び、和歌、絵画に優れ、特に書家としては「寛永の三筆」と称され、近衛流書道の始祖といわれています。

慶長10年(1605)5月、信尹は心願の筋があってこの地の産土神兵主神社に参詣し、和歌を献詠しています。



◆興禅寺庭園



◆信尹懐紙(兵主神社蔵)

わきざかじんない やすはる
脇坂甚内(安治)

甚内は羽柴秀吉の家臣で、賤ヶ岳七本槍の1人。後に安治と名を改め播州龍野城主となりました。丹波攻略がはかどらないため、信長は播州に在陣中の秀吉に助勢を命じました。しかし、播州の情勢不安定の中、助勢を向けることが出来ない秀吉は、甚内に命じて、黒井城の悪右衛門直正への開城説得に当たられます。

天正6年(1578)2月、甚内は単身黒井城に乗り込みますが、直正は説得に応じず、その代りこの若者の勇氣と厚意を謝して、赤井家重代の家宝「紹の皮」を贈りました。現在も安治を祭る龍野神社に宝物として納められています。この時の様子が司馬遼太郎の小説「紹の皮」で描かれています。

黒井城関係年表

西暦	紀年	事	項
1335	建武2	赤松貞範、丹波の国春日部荘を領す。	
1542	天文11	赤井才九、朝日村荻野18人衆の盟主となり荻野直正を名乗る。	
1554	天文23	直正、叔父の黒井城主荻野伊豫守秋清を殺し自ら黒井城主となる。これにより号を悪右衛門と称す。黒井城の改修に着手する。	
1557	弘治3	兄赤井家清戦傷により死去。直正、赤井一族の盟主となる。	
1565	永禄8	直正、多紀郡を除く丹波地域を支配し、戦国大名となる。	
1568	永禄11	信長、足利義昭を奉じて入洛。直正、信長に降る。将軍、関白近衛前久を京より追放する。直正、前久を庇護し、前久の妹を娶る。	
1573	天正元	直正に、足利義昭の使者御内書を持参す。甲斐の武田勝頼、信長打倒の親書を差し出す。	
1576	天正4	明智光秀、黒井城を包囲。従う丹波勢反旗をひるがえし織田軍大敗を喫す。	
1577	天正5	信長、明智光秀、細川藤孝に再び丹波攻略を命じる。	
1578	天正6	秀吉、家臣の脇坂安治を黒井城に遣わし、降伏勧告をさせる。直正説得に応じず、引き出物に赤井家重代の家宝「紹の皮」を安治に与える。3月9日、直正、疔により病没す。	
1579	天正7	織田軍氷上郡に侵攻し、黒井城の先鋒支城を落城させ、8月9日黒井城総攻撃を開始。同日夜、落城す。光秀、黒井城南麓に陣屋を設け、家臣齋藤利三に代官を命じ氷上郡地方の統治にあたらしめる。	
1582	天正10	本能寺の変の後、秀吉の家臣、堀尾吉晴が黒井城に入城する。	
1584	天正12	小牧長久手合戦に家康に呼応して直正の末弟時直が黒井城に立てこもり一揆を策動する。	

さいとうとしみつ かすがのつぼね ふく
齋藤利三・春日局(お福)

天正7年(1579)黒井城落城の後、戦後統治にあたったのが、光秀の重臣齋藤内蔵助利三です。利三は下館(現興禅寺)を陣屋として西丹波一円の治安に当たりました。北の城下にある白毫寺には利三の軍役容赦の下知状が残されています。

黒井城下に活気が戻ってきた頃、利三は亀山城から妻お安と子ども達をこの陣屋に呼び寄せました。

そして、この年の暮れも間近い頃、呱呱の声をあげたのがお福、後の春日局です。

陣屋跡は齋藤屋敷と呼ばれ、昭和初期建立の春日局生誕地の碑があります。

また、JR黒井駅前に建つ幼いお福の像は、この町のシンボルとして親しまれています。



◆齋藤利三下知状(白毫寺蔵)



◆JR黒井駅前広場お福像

その他ゆかりの人びと

さつかわもとほる
●吉川元春

中国の雄、毛利輝元・吉川元春・小早川隆景と荻野直正を中心とする丹波・但馬の諸豪は信長打倒への上洛作戦「三道併進策」の盟約を結びました。吉川家文書などにその緊迫した動静がうかがえます。毛利の外交僧安国寺恵瓊も度々当地を訪れています。

たけだかつより
●武田勝頼

甲斐の武田勝頼と荻野直正の間には、反織田勢力として情勢を知らせ合う書翰の往来がありました。東西呼応して立ち上がろうと跡部大炊助・長坂長閑齋など武田の密使がたびたび来城しました。

ほんがんに けんによこうさ
●本願寺顕如光佐

信長と敵対する直正は、石山本願寺とも気脈を通じていました。本願寺顕如光佐の家老であり、一向一揆を指導していた中心人物の一人である下関部法眼頼兼との間につぶさに情報のやりとりがあり、その書状が残っています。

ほりお も すけ よしはる
●堀尾茂助吉晴

山崎の戦いの後、天正10年(1582)夏羽柴秀吉の軍代として黒井城下館に入り、奥丹波の統治にあたりました。その時に、奉行をして再建した柏原八幡神社の本殿と拜殿は、国の重要文化財に指定されています。



◆荻野悪右衛門宛 武田勝頼書状

丹波市教育委員会

〒669-3198 兵庫県丹波市山南町谷川1110

TEL 0795-70-0819